

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 4 日現在

機関番号：32612

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22820055

研究課題名（和文） 複文化環境における弱者・少数者に対するディスコースの分析

研究課題名（英文） Analysis of discourse towards minority in pluricultural environment

研究代表者

鈴木 雅子 (SUZUKI MASAKO)

慶應義塾大学・外国語教育研究センター・助教

研究者番号：10588560

研究成果の概要（和文）：本研究の結果、弱者・少数者に対する配慮に欠けた発言は弱者・少数者が自分の日常生活で触れ合うことのない集団のみを対象に行われるのではなく、非常に身近な集団に対しても行われることがわかった。地理的に離れた集団についてだけでなく健康状態、性別や年齢が異なる極身近な他者への配慮を学習課題に盛り込むべきである。また、発言の意味を咀嚼するために必要な社会知識が足りない場合も多く見られた。これまで以上の国語科や社会科との連携が求められる。

研究成果の概要（英文）：This research found that insensitive speeches towards minority group appears not only when the minority is the detached group from our own daily life. Many of the observed problematic speeches were towards non-geographic group such as sickness and disability groups, gender groups and age groups. In many cases subjects expressed their lack of background knowledge to understand the statement well. More collaboration with other subjects as social science class and first language education class will make an important difference in letting students have opportunity to obtain the ability to stay sensitive towards minorities in argumentative communication.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,200,000	660,000	2,860,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：外国語教育

キーワード：ディスコース・弱者・少数者・コミュニケーション・複文化・差別・ディベート

1. 研究開始当初の背景

文化的・社会的弱者の背景及び抑圧の形態は多様である。今後益々進む複文化的世界・社会においては、特に文化・宗教・民族・ジェンダー・障害・経済状況等での弱者・少数者に対する配慮が不可欠である。また、新たな言語を学習することは新たな文化を学ぶこ

とであり、自らとは異なるアイデンティティや痛みへの共感能力、想像力・判断力を要請する。

2. 研究の目的

本研究は、複言語・複文化的なコミュニケーション環境での文化的・社会的弱者に対する

言語表現が陥りやすい問題を分析した。本研究は第一に、実際の複文化環境で多量に採取した言語表現から問題の所在を分析し、第二に言語学習者のそうした言説に対する意識・態度を社会調査により明らかにした。第三として、第一と第二の比較から発生頻度が高いにも拘らず社会的認知の低い問題表現の類型を洗い出し、特に学習機会の拡充が必要とされる項目として教育の場に提言していく基礎をつくった。

3. 研究の方法

本研究では、まず2010年秋に様々な学生向け国際イベントのCode of Conductを収集し、複言語・複文化コミュニケーションに求められている配慮の定義を分析した。2010年冬から2011年夏まで、実際の複文化コミュニケーションのデータを学生の国際イベントにて採取し、上記定義に照らして配慮に欠けた言語表現をリストアップ・分類した。2011年秋に日本人の学生を対象に社会調査を実施し、どの分類の問題表現に気がつきにくいかを検証する予定だったが、震災の影響もあり2012年春にずれた。2012年春から、複文化コミュニケーションで頻発するにもかかわらずその攻撃性に気がつきにくい言語表現のタイプを、今後学習機会の拡充が必要な分野として教育現場に提言し、また以降の異文化・複文化コミュニケーションの教授法研究の基礎としている。

第一段階：現在の教育活動及び国際イベントにおける取組の実態調査
複言語・複文化環境のコミュニケーションが急速に増加する現在、多くの国際集会ではEquity Officerという役職が設けられている。各集会のEquity Officerは弱者やマイノリティに対する差別的な言動をなくすための取り組みを行う。応募者自身もWorld Universities Debating ChampionshipsのEquity Officerを5年間務めた。本研究ではまず、様々な国際集会において何人のEquity Officerがどのように任命されているのかをまず確認した。
また、同様の集会では参加者にCode of Conduct(行動指針)を提示し、同意の署名を求めることも多くなっている。この行動指針には、集会の国際性を理解し、様々な背景を持つ参加者に配慮した行動を取ることを義務付けている。本研究では国際集会のCode of Conductを収集し、その文言の共通点と特徴を把握することで、問題表現の定義を定めることを試みた。

第二段階：ビデオ観測
特に高校生・大学生向けの国際集会における議論をビデオ撮影した。撮影対象はいずれも

50カ国前後が参加する英語ディベートの国際大会とした。

二回の調査出張で撮影した約400名のスピーチ映像を観察し、弱者・少数者に対する発話を収集した。そのために必要なトランスクリプトの作成をテープ起こし委託を通じて行った。

第三段階：リストアップ

収集した発話の中から、背景が多様な聴衆の前で発信された弱者・少数者に対する特徴的なディスコースをリストアップした。この作業はまず応募者が行い、その後3名のディスコース研究の専門家に確認を依頼した。意見が割れる発話に関しては4名で話し合いの上、決まらない場合にはリストから外すものとした。

第四段階：ディスコースの分類・整理

リストアップしたディスコースについて、多角的に分析を行った。どの民族、どの宗教、どのジェンダーに対するディスコースが多く観測されたか、話者の所属集団は多数派かという点の他、直接的な表現、間接的な表現、反語表現、皮肉などどのような表現形態が多く観測されたかという点など、分類と分析を多角的に行った。

第五段階：社会調査

まず上記の分類の典型例となる表現を個人情報取り扱い上問題のない形に加工する。その加工した表現を被験者に提示し、問題を認識するかどうか、する場合にどの程度深刻な問題と捉えるか、官能評価実験を行う。現在被験者は日本人の男女で7段階評価の官能評価実験を行った。

第六段階：比較分析と教育への提言

第四段階で問題が頻発していると思われた分類と、第五段階で被験者が問題と認識した分類にずれがあるかどうかを検証する。ずれがある場合には、発生頻度が高いにも拘らず社会認知が低い分類を特定し、その分類に関する学習機会の創出を提言する。

4. 研究成果

(1) 現在の教育活動の試み

World Schools Debating Championships 日本代表チームが行っている弱者・少数者への配慮を身に着けるためのトレーニングについてまとめ、『iDebate』(2010年発行)及び『International Society for the Study of Argumentation Proceedings 2010』にて報告した。また、欧米における異文化コミュニケーションのトレーニング法を教材分析により研究した。題材が日本の学生には理解しに

くいものも多い他、弱者や少数者への配慮に特化した教材はないことが分かった。このため教材開発も非常に重要な課題となることが明らかとなった。また、自分の背景からかけ離れた他者の気持ちを想像し汲み取ろうとするためには、活字教材だけでなくマルチメディア教材をふんだんに取り入れることが重要であると考えた。

(2) 国際イベントにおける取組の実態調査

World Universities Debating Championshipsをはじめとした国際ディベート大会での差別的発言への取組の経緯を、同コミュニティの人数構成について分析した上で調査し、ディベート以外の様々な国際集会における取組と比較した。また、国際集会のCode of Conductを収集し、その文言の共通点と特徴を把握することで問題表現の定義を模索した。これらの成果を The 3rd International Conference on Argumentation, Rhetoric, Debate and the Pedagogy of Empowerment (2010年10月、スロベニア)にて発表した。

(3) ビデオ観測

高校生・大学生の国際集会における議論を The 31st World Universities Debating Championships (WUDC) (2010年12月、開催地：ボツワナ)にてビデオ撮影した。スピーチ映像を観察・トランスクリプト化し、弱者・少数者に対する発言を収集した。また、過去の高校生大会、大学生大会、オープン戦のビデオを収集し、それらもまたトランスクリプト化し分析の対象として採用した。

(4) リストアップ

収集した発言の中から、背景が多様な聴衆の前で発信された弱者・少数者に対する特徴的なディスコースのリストアップを開始した。3名のディスコース研究の専門家に応募者が作成したリストの確認を依頼した。このリストを基にした考察を『慶應義塾 外国語教育研究』第7号(2011年3月発行)にて発表した。高校生大会からのもの、大学生大会からのもの、そして社会人を含むオープン戦からのもの、それぞれからサンプルが集まり、年齢と弱者・少数者への敏感さは必ずしも比例しないことが示唆された。」

(5) ディスコースの分類・整理

アムステルダム大学教授 van Eemeren 氏の指導の下、リストアップされた発言を Pragma Dialectics の立場から分析した。途中まで Fallacy の分類形式を踏襲する方法を検討したが、Insensitive Speeches の定義上 Fallacy とは異なる点も多いということで、

新たな分類方法を開発することとした。現在、作成したカテゴリーに分類する精度の確認のため、協力者を得て分類実験を行っている。対象とされている弱者・少数者集団を基にした分類では、ジェンダーや居住地、健康問題や年齢といった人種や国籍以外を対象とした発言が多かった。但し、母語に絡めた国籍についての発言には大変悪質なものも見られた。また、女性が女性に対してしている女性蔑視発言や、有色人種が有色人種に対して行った人種差別発言など、配慮に欠ける発言の中で、弱者・少数者集団に帰属する者自身が当該集団を貶める発言をしているケースが予想外に多かった。このため、被差別者自身が被差別グループに対して行う差別的発言はそれ以外に比べて倫理的問題が小さいかどうかの一つの議論の焦点となった。これらの成果を2012年6月のThe 14th Biennial Conference 及び2012年8月のThe 4th Tokyo Conference on Argumentation で報告する予定である。

(6) 社会調査

典型例となる表現を被験者に提示し、問題を認識するかどうか、する場合にどの程度深刻な問題と捉えるか、官能評価実験を行った。23名の被験者の内、半数以上が問題を認識する割合が3割未満となった。また、認識率100%の被験者は0人であった。想定していたよりもジェンダーや居住地については敏感であることが分かったが、健康問題や年齢、宗教については鈍感であると思われた。実験においてコントロールグループのプロフィールに偏りを感じたため、より広範な被験者を対象にした詳細な分析が必要であると考えた。そのため2012年度に新たな被験者集団を集め追加実験を行う予定である。その成果は、2013年1月に開かれるThe 4th International Conference on Argumentation, Rhetoric, Debate and the Pedagogy of Empowermentにて発表したいと考えている。

(7) 比較分析と教育への提言

第四段階で問題が頻発していると思われた分類と、第五段階で被験者が問題と認識した分類にずれがあるかどうかを検証した結果、健康問題や年齢について教材に取り上げる必要があると思われた他、宗教や民族についてはそれ以前の背景知識の学習が必要であることが分かった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

①鈴木雅子・境一三. 2011. 「コミュニケー

ション摩擦と社会公正： 国際ディベート大会での調査から」. 『外国語教育研究』. 第7号. 47-72. 慶應義塾大学外国語教育研究センター. 査読有り.

②Suzuki, M., Yano, Y. & Sakai, K. 2011. Adaptation to Adjudication Styles in Debates and Debate Education. International Society for the Study of Argumentation Proceedings. 1841-1848. International Society for the Study of Argumentation. 査読有り.

③ Suzuki, M. 2010. The Japanese Perspective: Japan Returns!. iDebate. Vol. 9 Issue 4. 89-90. International Debate Education Association. 査読なし.

④Hasumi, J. Suzuki, M. & Atobe, S. 2010. The learning of empathetic aspects of inter-cultural understanding through an international debating activity: A case of students in a Japanese upper-secondary school. Proceedings of London International Conference on Education (LICE). 256. London International Conference on Education. 査読なし.

[学会発表] (計 12 件)

①Suzuki, M. 2012. Topic Dividing The World. The 4th Tokyo Conference on Argumentation. Tokyo. 8月12日.

②Suzuki, M. 2012. Fuhyo Higai [Harmful Rumors]. The 4th Tokyo Conference on Argumentation. Tokyo. 8月11日.

③Suzuki, M. 2012. Ethical Calls Students Make In Debate Classes. The 14th Biennial Conference. Venice. 6月26日.

④Kohbara, A., Suzuki, M., Nakamura, F. & Sakai, K. 2011. English-language debate as an (anti-)oppressive practice: Through the lens of Social Role Valorization Theory. Gozo. 3月8日.

⑤Nakamura, F., Suzuki, M., Kohbara, A. & Sakai, K. 2011. Classification of Offensive Speeches: Data from International Debate Competition. Gozo. 3月7日.

⑥Nakamura, F., Suzuki, M., Hasumi, J. & Sakai, K. 2011. What should be avoided in intercultural communication?: Collection

and classification for new language education. Brisbane. 2月12日.

⑦Nakamura, F. Suzuki, M. & Sakai, K. 2010. Don't Speak For Others! : offensive speeches in international debate competitions. International Journal of Arts and Science Conference 2010. Gottenheim. 12月1日.

⑧Suzuki, M. 2010. An Approach to Analysis on Discourse toward Minority. The 3rd International Conference on Argumentation, Rhetoric, Debate and the Pedagogy of Empowerment. Maribor. 10月24日.

⑨Hasumi, J. Suzuki, M. & Atobe, S. 2010. The learning of empathetic aspects of inter-cultural understanding through an international debating activity: A case of students in a Japanese upper-secondary school. London International Conference on Education (LICE). London. 9月6日.

⑩Hasumi, J. Suzuki, M. & Atobe, S. 2010. Rational argument and cultural sensitivity: A case of Japanese students in international debating competitions. The 6th International Citized Conference. St. Andrews. 7月4日.

⑪Suzuki, M. Yano, Y. & Sakai, K. 2010. Adaptation to Adjudication Styles in Debates and Debate Education. The 7th Conference on Argumentation of the International Society for the Study of Argumentation (ISSA). Amsterdam. 7月1日.

⑫Suzuki, M. Hasumi, J. & Atobe, S. 2010. Examining the relation between eye contact ratio and speaking assessment. The 22nd International Conference on Second Language Acquisition and Foreign Language Learning. Szczyrk. 5月27日.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 雅子 (SUZUKI MASAKO)

慶應義塾大学・外国語教育研究センター・
助教

研究者番号：10588560